
許して下さい許して下さい

凌辱し太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

許して下さい許して下さい

【コード】

N0600Q

【作者名】

凌辱し太郎

【あらすじ】

みなちゃん、ごめんなちゃん。

「あ、兄貴…… 人生相談がね、あるんだケド……」

そう言っつて俺の部屋に入っつてきた桐乃。

「人生相談っつて、まじかよ……？」

俺は先ほど桐乃から借りたエロゲーを終えて、いい気分だったのに、あいつはまた厄介事を俺に持ちこんできやがった。

頼むから今だけは、何も無い幸せを噛みしめさせてくれ

……！

「……うん。あんただけにしか頼めない事……」

そんな俺の希望はあっさりと打ち砕かれた。

「そうかい。で、何の相談だ？」

妹がいるのに、妹を攻略するエロゲーをするという精神的苦行を乗り越えてきた直後というのは、なかなか辛い。休ませてもほしいものだ。

だが、俺にしかできない事つつーんなら、やってやらなきゃダメだよな。いくら大っきらいな妹でもよ。

「……ん、えつとね……」

桐乃は扉の前から動かず、えつとねしか言わない。……

何だこれは？ 今までの桐乃の行動を見てきた俺としては、今日の前にある光景は、ありえない光景だ。

それに妙にモジモジするし…… 気持ち悪いな。

「何だ？ トイレ行きたいなら行っつてこいよ」

「そ、そんなんじゃない！ バカ……」

そんなことはわかってる。だが、何分もそのモジモジを見せられる側としては、嫌みの一つでも言いたいということだ。

それにしても…… 『バカ』で……

あんな可愛らしい『バカ』は初めて聞いたぞ。本当にど

うしたんだ桐乃……？

「つだー、とりあえず入れよ。そんなとこにいないでよ」
十分ほどその状態が続いたので、とりあえず部屋に入
れることにした。

「……………ん」

「つておい！？ 何でここに座る！？」

桐乃はそう言う部屋に入って、俺が用意した座布団に
座らず、俺が座っているベッドに座りやがった。しかも俺と密着す
るように。

な、なんだよマジで！？

「いいジャン別に……………文句あんの？」

桐乃は捨てられた子犬のような潤んだ瞳で俺を見てそう
言った。

……………くっ！ 何だつてんだよ本当に。

「へいへい、わーっただよ。わかりました。どうぞお好きな
ところにお座り下さい」

俺はそんな桐乃に根負けした。

今にも泣きそうな顔で見つめられれば仕方ないことだろ
う？

「……………そう、ふふ」

俺の言葉聞いた桐乃は、嬉しそうにほほ笑んだ。

本当に気持ち悪いな。エロゲーだったらここでイベント
CGに入るけどな。

「……………」

「……………」

「……………で、人生相談ってなんなんだ？」

それからまた桐乃は黙りだした。さすがに我慢できなか
った俺は桐乃から話し出す前に聞いた。

「……………」

「おい、桐乃？」

それでも桐乃はダンマリ。さすがにイライラしてきた俺

は、桐乃の顔を覗き込みながら呼んだ。

「……おいおい」

覗き込むと、桐乃は、目を固く閉じて、口を引き結び、顔をりんごように真っ赤にしていた。

よく見てみると、身体も小刻みに震えている。

こいつ体調悪いのか？

「おい、体調悪いなら」

「大丈夫」

「お、おう」

急にそんな返答が返ってきたので、情けないがびっくりしてしまった。

「なあ桐乃なんだよ？ おまえが言わなきゃ俺はわかんねえぞ」

俺がそう言うと、桐乃はやっと俺の方へ顔を向けた。

「じゃあ言うケド、軽蔑しない？」

そう言う桐乃の顔は、先ほどと同じように泣きそうな顔だった。

だからその顔はやめてくれ……。俺が悪いことしたみたいじゃねえか。

「ああ。もうさんざんすげーもん見せられたからな、軽蔑はしねーよ」

というか、今更何に軽蔑すりゃいいんだ。妹に『妹もののエロゲーを自慢される以外にすげーもんでもあんのか？

「じゃあ言うね」

桐乃は俺の言葉に嬉しそうにほほ笑むと、真剣な顔になつて俺を見つめた。

「あたしね、あんたから返してもらったPCでエロゲーやってたのね」

「ああ」

はあ、そうっすか、みたいな感想しか浮かんでこない。

俺もなかなか桐乃に汚染されてきているようだ。

「それでね、やってたんだケド、なんかいつもと違うなって思ったの」

「何が違ったんだ？」

「なんか頭がぼーっとしてきてね」

そう言いながら、桐乃はただでさえ近いのに、俺に近づいてくる。

お、おいどうしたんだ……！？

「でね、身体も熱くなってきたね」

「おい……！」

桐乃は俺の制止も聞かずに体を乗り出してくる。

「心臓もバクバクいつてね」

俺の肩に手を置いて

「兄貴に会いたくなって思ってたね」

そのまま俺を押し倒して

「せつないの」

馬乗りになった桐乃は、抱きついてきた。

お、おい！ こりゃやばいんじゃない？

「おいきり」

「黙って」

桐乃は俺の口に手を当てて、声を出せないようにした。

「スーハー、兄貴の匂い……」

「……！」

桐乃は、俺の身体中の匂いを嗅いでいる。

俺は声を出せないし、もがいても桐乃が上にいるので抜けだせない。なんつー力出してんだお前！

「兄貴の匂い、もっと嗅ぎたい……」

桐乃は顔を真っ赤にして、とろんとした目をしている。

「兄貴の匂い……はあはあ……兄貴の匂い……」

桐乃は俺の口から手を離れたかと思うと、俺のズボンに

手をかけ

「っは！ 何だ夢かよクソ！ …… って夢精してやがる…

…」

おまえら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600q/>

許して下さい許して下さい

2011年11月16日23時40分発行